

富山県五箇山（上平村真木）方言の待遇表現

真田 信治

I. はじめに

- (1) 調査対象地：調査地点としたのは、北陸、富山県の西南端に位置し、五箇山郷と通称される地域に属する、東砺波郡上平村真木集落である。戸数5戸の小さな山村集落である。インフォーマントの生育地である。ただし、インフォーマントは現在、富山市呉羽富田町に移住して生活している。他地域での生活歴が長いが、『越中五箇山方言語彙』の著者でもあり、内省は確かである。
- (2) 調査年月日：1997年1月2日
- (3) インフォーマント：真田ふみ 1924年9月27日生（72歳） 元教員
- (4) 調査者・調査場所：真田信治・インフォーマント宅
- (5) 調査方法：当該調査票による質問調査。調査者もこの方言の理解が可能なので、インフォーマントの回答に補足を加えながら調査を行なった。
- (6) 表記方法：方言事象は、カタカナで表記する。なお、この方言のアクセントは下がり目の有無と位置だけがその弁別特徴なので、下がり目の位置を¹で示す。インフォーマントのコメントは（ ）で示した。

II. 調査結果

1. 尊敬表現

1-1 対者敬語

- (1) A お前は アンタ 係助詞「は」は省略されるのが普通である。
元気かね ゲ¹ンキケ
- B あなたは オマイ
元気かね マメナ¹カイシ
- C あなたは オマイサマ
元気かね マメデゴザ¹ルカイシ
- (2) A あしたは家に居るか アシタ ウ¹チニ オラレ¹ルケ
- B あしたは家に居るか アシタ ウ¹チニ ゴザ¹ルカイシ
- C あしたは家に居られますか アシタ ウ¹チニ ゴザ¹ルカイシ
- (3) A あした行くか アシタ イカレ¹ルケ
- B あした行きますか アシタ イカッサ¹ルカイシ
- C あした行きますか アシタ イカッサ¹ルカイシ
- (4) A 温泉に行かないか オンセンニ イカレ¹ンケ

- B 温泉に行かれませんか オンセンニ イカッサラ^ンカイシ
 C 温泉に行かれませんか オンセンニ イカッサラ^ンカイシ
- (5) A しますか サッサ^ルカイシ
 B されますか サッサ^ルカイシ
- (6) A 見ましたか ミヤッサ^ッタカイシ
 B 見ましたか ミヤッサ^ッタカイシ
- (7) A ゆうべは何時に寝ましたか ヨンベ ナ^ンジニ ネヤッサ^ッタカイシ
 B ゆうべは何時に寝ましたか ヨンベ ナ^ンジニ ネヤッサ^ッタカイシ
 C 寝てください ネラ^レ/ネテクダサ^リイ (ネラレは少し親しすぎる感じがする。)
- (8) A どこに行っているか ドコニ イットラレ^ルケ
 B どこに行っていますか ドコニ イッテゴザ^ルガイシ
 C どこに行っていますか ドコニ イッテオイデ^ルガ ガは終助詞の「の」に相当する。
- (9) A どうぞ食べてくれ タベラ^レ
 B どうぞ食べてください ド^ーゾ タベテクダサ^リ
 C どうぞ食べてください ド^ーゾ タベテクダサ^リ
- (10) A その写真を私に見せてくれないか ソノシャシン ワタシニ ミセテクレンケ^テ
 B その写真を私に見せてくださいますか ソノシャシン ワタシニ ミセテクダサラ^ンカイシ
 C その写真を私に見せてくださいますか ソノシャシン ワタシニ ミセテクダサラ^ンカイシ

1-2 第三者敬語

- (11) A あしたは家に居るだろう アシタ ウ^チニ オラレ^ルヤロ
 B あしたは家に居るだろう アシタ ウ^チニ オラレ^ルヤロ
 C あしたは家におられるでしょう アシタ ウ^チニ オラレ^ルヤロ
- (12) A 居なかった オラレナ^ンダ
 B 居なかった オラレナ^ンダ
 C 居なかった オラレナ^ンダ
- (13) A そう言った ソーイワッサ^ッタ
 B そう言った ソーイワレ^タ
- (14) A 今そこに行っていた サ^キ ソコニ イットラレ^タ (この文脈では「今」は不自然である。)
 B 今そこに行っておられた サ^キ ソコニ イッテゴザ^ッタ

- C 今そこに行っておられた サ^レキ ソコニ イッテオイデ^ルタ
- (15) A 来ている キトラレ^ルル
 B 来ている キテゴザ^ルル
 C 来ている キテオイデ^ルル
- (16) A 仕事を シゴト 格助詞「は」は省略されるのが普通である。
 している シテゴザ^ルル
 B 仕事を シゴト
 している シテオイデ^ルル
- (17) A 見せてもらった ミセテモロ^クタ
 B 見せてもらった ミセテモロ^クタ
 C 見せてもらった ミセテモロ^クタ
- (18) A 見せてくれた ミセテクレ^クタ
 B 見せてくれた ミセテクダサ^クッタ
 C 見せてくれた ミセテクダサ^クッタ
- (19) A 私にくださった ワタシニ クダサ^クッタ
 B 私にくださった ワタシニ クダサ^クッタ
- (20) A いただいた モロ^クタ (この文脈では「いただいた」は使わない。)
 B いただいた モロ^クタ

2. 謙譲表現

2-1 謙譲表現

- (21) A 私も ワタシ^モモ
 B 私も ワタシ^モモ
 C 私も ワタシ^モモ
- (22) A 十分に食べました イッバイ イタダ^クイタワ 「ワ」は終助詞。
 B 十分に食べました イッバイ イタダ^クイタワ
- (23) A 持ちましょう モトッカ^クイシ
 B 持ちましょう モトッカ^クイシ
- (24) A 待たせたね マタセ^クタネ
 B お待たせしました キノド^ククナ マタセ^クタネ 「キノドクナ」は謝罪の挨拶表現。
 C お待たせしました スミマセ^ン マタセ^クタネ
- (25) A 駅で待っているよ エキデ マット^ルルワ
 B 駅で待っていますよ エキデ マット^ルルワ
 C 駅で待っていますよ エキデ マット^ルルワ

- (26) A 言ってくれ ユーテクレンケ^ㇿ
 B 言ってくれ ユーテクダサ^ㇿリ
 C 言ってください ユーテクダサ^ㇿリ
- (27) A これをやろう コレ アゲヨ^ㇿッケ
 B これをあげましょう コリ マシヨ^ㇿッカイシ 「ませる」は敬語動詞。
 C これをあげましょう コレ マシヨ^ㇿッカイシ

2-2 身内敬語

- (28) A 買ってやった コーテヤ^ㇿッタ
 B 買ってやった コーテヤ^ㇿッタ
 C 買ってやった コーテヤ^ㇿッタ
- (29) A 主人はもう帰っている ト^ㇿーチャン ハヤ カヤッテゴザ^ㇿル (「ハヤ」は、もうの意味。)
 B 主人はもう帰っています ト^ㇿーチャン ハヤ カエッテオイデ^ㇿル

3. 丁寧表現

- (30) A 行くよ イクワ^ㇿ
 B 行きます イクワ^ㇿ
- (31) A 寒いね サブ^ㇿイ ネ^ㇿー
 B 今日は寒いね キョ^ㇿーワ サブ^ㇿイ ノ^ㇿイ
 C 今日は寒いですね キョ^ㇿーワ サブ^ㇿイ ノ^ㇿイ
- (32) A 居るよ オ^ㇿル
 B 居ます オ^ㇿル
- (33) A よかったねえ ヨカ^ㇿッタ ネ^ㇿー
 B よかったですねえ ヨカ^ㇿッタ ノ^ㇿイ
 C よかったですねえ ヨカ^ㇿッタ ノ^ㇿイ
- (34) A そうか ソ^ㇿーケ
 B そうですか ソ^ㇿーカイシ
 C そうですか ソ^ㇿーカイシ

4. 人間関係に応じた待遇表現

4-1 特定表現の待遇表現

- (35) その角を曲がって右へ行くと～ ソノカドオマガラレ^ㇿテ ミギニイカレ^ㇿルト～
 (マガッテモロテ～のような言い方もできないわけではないが、普通ではない。)
- (36) とんでもない トンデモナ^ㇿイワ (トンデモゴザイマセンといった言い方は存在しない。)

4-2 多人数場面の待遇表現

- (37) それでは引き受けさせていただきます ソンナラ ヒキウケサセテモライマス
- (38) 今度の旅行には参加者が少ないので、皆さん参加してほしい コンドノ リョ
コー イカレールヒトガ マダスクナイガデ ミンナモ ゼヒ サンカシテクダ
サレケンケ

4-3 位相による待遇表現

(39) A おはよう

1. オハヨーゴザイマス
2. オハヨーゴザイマス
3. オハヨーゴザイマス
4. オハヨーゴザイマス
5. ハヤイ ノイ
6. ハヤイ ネー
7. オハヨーゴザイマス
8. オハヨーゴザイマス
9. ハヤイ ネー
10. ハヤイ ネー
11. ハヤイ ネー
12. ハヤイ ネー
13. オハヨ
14. オハヨ

B どこへ行くのか

1. ドコエ イカレマスケ
2. ドコエ イカレールー 以下、ーはイントネーションを表す。
3. ドコエ イカレールー
4. ドコエ イカレールー
5. ドコエ イカッサルカイシ
6. ドコエ イカッサルカイシ
7. ドコエ イカレールー
8. ドコエ イカレールー
9. ドコエ イカレールケ
10. ドコエ イカレールケ
11. ドコエ イカレールケ
12. ドコエ イカレールケ
13. ドコエ イクガ

Ⅲ. まとめ

この方言における伝統的な待遇表現のパターン、およびその動態については、真田信治『地域言語の社会言語学的研究』（和泉書院、1990）、姜錫祐「越飛国境域における待遇表現—対称代名詞と『行く』の表現形を中心に—」（『五箇山・白川郷の言語調査報告』真田信治編、1997）などを参照されたい。

ここでは、当該インフォーマントの現在の運用を記述することを旨とした。（ただし、インフォーマントは富山市に在住しているので、「調査対象地、上平村における現在の現在」という設定で回答してもらっている。）伝統的な形式と新しい形式が混用されているが、これが運用の実態というものであろう。なお、ここで言う新しい形式とは、県の都市部から当該山間部に取り込まれた“クァージ標準語”である。具体的には、対称代名詞の「ア⁷ンタ」、疑問の終助詞の「ケ」、命令形を持つ「レル・ラレル」敬語、敬語動詞の「オイデル」などである。ちなみに、「デス・マス」の使用はまだ一般的ではないようである。

このインフォーマントには、B（近所の年長の人）とC（土地の目上の人）に対しては伝統的形式を使用する傾向が認められる。ただし、Cに対しては新形式を使うこともあり、ゆれているようである。なお、A（親しい友人）にはインフォーマントと同世代の人物が想定されているため、ふつう、敬語、しかも新形式が用いられる。敬語のない形式は子供（中学生）に対してしか現われない。

（さなだしんじ 大阪大学文学部）